

【プレスリリース】

名勝『落門の滝』、国登録記念物への登録について



大分県竹田市

令和5年10月20日

—豊後竹田駅背後の断崖絶壁を流れ落ちる一筋の滝、
実は城原井路の末流という人工の瀑布、
その名は広瀬淡窓の漢詩に由来—

国の文化審議会（会長 佐藤 信）は、10月20日（金）に開催された同審議会文化財分科会の審議・議決を経て、本市に所在する名勝「落門の滝」の国登録記念物への新登録について、文部科学大臣に答申しました。この結果、官報告示を経て、名勝「落門の滝」は国登録記念物に登録される予定で、竹田市の国登録記念物は2件となります。

（もう1件は平成19年7月26日に登録された「白水の滝（竹田市荻町陽目）」）



落門の滝



佐久間竹浦筆「落門の滝四季真景図」

「落門の滝」（国登録記念物）

落門の滝は、大分県南西部の竹田市街地の断崖に懸かる人工の瀑布である。その成り立ちは、岡藩主の中川久清（1615-1681）が、備前国岡山藩から熊沢蕃山（1619-1691）を招請して、その指導の下に寛文元年（1661）から同2年にかけて農業水利施設として開削した城原井路によるもので、稲葉川支流の久住川に取水し、その末流のひとつとして「滝の上」から落差約40mの崖下に広がっていた「下木」の水田に用水して、稲葉川に合流したものである。この瀑布は、会々の滝、雲井の滝、下木の滝、布引の滝、不動の滝など、さまざまに呼ばれて来たが、今日、広く「落門の滝」の名称が定着しており、その名は、広瀬淡窓（1782-1856）が若い頃に初めて竹田に滞在したことを懐旧して詠んだ漢詩にある「断崖泉落大夫門」（断崖の泉、落つる大夫の門）に由来すると言われている。崖下の水田は、大正13年（1924）10月に犬飼線（現・豊肥本線）の延伸に伴う豊後竹田駅の開業以降、鉄道用地、道路、宅地となって今は無いが、竹田出身の南画家・佐久間竹浦（1876-1925）が同年8月に描いた『落門の滝四季真景図』（六曲一隻の屏風絵）は、岡城城下町の風致景観の要を成してきた「落門の滝」の卓越した存在感を伝えている。今では竹田駅舎の背後に切り立った崖地に懸かる瀑布の姿にかつての風光明媚を伝える。

【問い合わせ先】 竹田市教育委員会まちづくり文化財課 電話：0974-63-4818